

『韓国語教育研究』(第6号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

韓国語母語話者の感情別イントネーション  
— 「아 그래요」を中心に—

崔 壯源

日本韓国語教育学会

2016年9月

# 韓国語母語話者の感情別イントネーション — 「아 그래요」を中心に—

崔 壯源

本稿は 韓国語 억양의 문법적 기능, 화용론적 기능, 감정, 태도의 전달 기능 중에서 학습자가 의도하지 않은 오해를 불러 일으키기 쉬운 감정, 태도의 전달 기능이 韓国어 모어화자 안에서는 어떻게 일어나고 있는지를 조사했다. 조사는 韓国어 모어 화자 33명이 아 그래요의 문장을 중립, 놀람, 의심, 낙담, 기쁨의 5가지 감정으로 발화한 것을 다른 그룹의 韓国어 모어 화자 30명에게 청취 평가를 의뢰했다. 그 결과, 韓国어 모어 화자 안에서도 5가지 감정이 정확하게 전달 되는 것은 상당히 어렵다는 것을 알았다. 또한 韓国어 음성 교육 현장에 다음과 같은 제언을 할 수 있는 결과를 얻었다. 중립 발화는 문장 말의 상승조가 나타나지 않는 발화, 낙담은 문장 말에서 완만한 상승조가 나타나는 발화가 韓国어 모어 화자에게 화자의 감정대로 전달되기 쉽다. 문장 말에서 급격한 상승조가 나타나는 발화는 놀람과 의심의 감정으로 전달 될 수 있다는 점이다. 즉, 학습자가 의도하지 않은 감정이 전달 될 가능성이 높은 핏치 패턴이라는 점을 본고에서 밝혔다.

## 1.はじめに

本稿は、話者の感情・態度を表すイントネーション教育の一環として、「아 그래요」の文章を用いて、韓国人母語話者の感情別イントネーションの特徴を把握・特定化し、学習者への教育に応用出来る韻律情報の視覚化資料の開発を目的とした基礎研究である。

日本語学習の場合、語の意味の弁別的特徴の習得、あるいは自然さにかかわる点から語アクセントを始めとする韻律教育の必要性が多く主張されている。韓国語のソウル方言の場合（以下、韓国語）単語の音調の違いによる意味の弁別機能を持たないため、指導現場において韓国語の韻律教育が盛んに行われているとは言い難い現状である。Kim E.A.(2002)は、3つ

の教育機関で韓国語を学習している 285 名の学習者を対象にしたアンケートを行い、イントネーションが最も難しく(25%)、その次が音韻規則(22%)、個別の子音(17%)の順で現れたことから、最も難しい音声学習項目として挙げられていることもイントネーションの学習と答えている。

Lee H.Y.(1996:227-244)は、韓国語のイントネーションの機能を下記の 3 つに分けている。平叙文・疑問文・命令文を区別する文法機能、命令文の中での命令・お願いなどの談話の機能を担う語用論的機能、同一の文章であっても断定的で冷静な態度・親切な態度・驚きなどを伝える話者の感情・態度の伝達機能である。本稿では、話者の感情・態度の伝達機能に注目した。初級学習者から上級学習者の間で最も発話頻度数の高い「あ、グレヨ:아 그래요 : Oh, really、以下 아 그래요」のイントネーションが筆者の教育経験からも気になる場合が多い。例えば、아 그래요の文末を急激に上昇させることで怒っている気持ちで表現しているのか、驚きの気持ちなのか、中立的気持ちなのか音が音声だけでは判断し難い。その原因が日本語の高低アクセントによる母語干渉から起因するものなのかなど、疑問も絶えない。そこで、韓国語音声教育の基礎資料の確保のため、まず、韓国語母語話者の感情別発話にはどのような特徴が表れるかについて調べる。

## 2. 先行研究と問題の所在

Lee H.G.(1996:2)は、「아 그래요」の「그래」は状況によって多様な談話機能を持っており、それらは一見意味的つながりがないかのように見えるが、一つの基本意味(basic sense)は共通しているという協力原理(Cooperative-Principle : Grice1975)を通して「그래」の意味弁別を報告している。そこで、「그래」の意味機能別に現れる音調は、Yes-No 疑問文に対する音調、提案や命令に対する反応としての音調、疑問文音調、軽い驚きや感嘆を表す音調に分けられるという。例えば、Yes-No 疑問文に対する「그래」には文末記号なし、疑問文の「그래」には「?」を付け、軽い驚きや感嘆を表す音調の「그래」には「!」をつけるなどをして、「그래」の談話的機能による文末記号の使い分けを施している。

Jung M.S.(2003)は、韓国内で最も多い中国人と日本人学習者を対象として、短い韓国語の会話文とそれぞれの学習者母語で対訳された文章を用いてイントネーションの比較を行った。その結果を表1に示す。

日本人学習者の場合は、日本語の高低アクセントの影響により HL のパターンが多く現れていること、また、Yes-No 疑問文では、上昇調が目立たなく、韓国語の疑問詞疑問文と同様の LH%で実現されており、文末の音節だけを急激に上昇させた発話パターンを指摘している。また、疑問詞疑問文の場合は、下降と上昇が共に見られる韓国語とは違って、上昇だけを実現した H%で現れているという。

表 1 中国人学習者と日本人学習者の文末イントネーション(Jung M.S.2003)<sup>1</sup>

|            | 韓国語                   | 中国人学習者   | 日本人学習者 |
|------------|-----------------------|----------|--------|
| 句の境界       | 上昇調                   | 下降調      | HL     |
| Yes-No 疑問文 | 下降ありの H% <sup>2</sup> | 下降無しの H% | LH%    |
| 疑問詞疑問文     | LH%                   | 上昇調      | H%     |

Jung M.S. (2003)では、強勢句、Yes-No 疑問文、疑問詞疑問文の文末のピッチを調査するため、日本語の Yes-No 疑問文に現れる「～か」と韓国語の Yes-No 疑問文の「～어요?」のピッチの実現の様子だけを比較した結果、日本語母語話者の発話からは、中立的発話意図なのか、驚き、疑い、落胆、うれしい気持ちでの表現をしているのかにかかわる誤用のパターンが多いと報告している。

Kim E.A. et(2008 : 101)は、感情及び態度の伝達機能は、イントネーションの社会言語学的機能と比較するとコミュニケーションで重要な機能を担うが、そのパターンを一般化し教育へ応用することは難しいとしている。つまり、Lee H.Y.(1996)で、3つに分類したイントネーションの機能中、文法的機能と語用論的機能は、感情や態度を表す機能よりイントネーション

<sup>1</sup> 表1は、Jung M.S (2003) の結果を述べた P237～P245 の内容を筆者がまとめたものである。

<sup>2</sup> 韓国語での H%は、文章末で後ろから2番目の音節が下降し、最後の音節で急激な上昇が起こるパターンとしている (Jung M.S.2003:238)

が担う意味の役割が大きいと言い、優先的教育内容にする必要があると主張している。

三木(2015)は、日本語の「そうですか」とそれに相当する韓国語訳語の「그래요」の文末記号の種類による日本語学習者の韻律特徴に注目した。韓国内で市販されている日本語会話の教科書 39 冊を調べた結果、日本語の部分の「そうですか」は 269 ヶ所あり、その後句読点の「。」をつけているところは 263 ヶ所であり、5 ヶ所が「…。」を、1 ヶ所で「？」をつけているという。反面、対訳語の韓国語を見ると、「그래요?(52.1%):그래요(6.4%)」、「그렇습니까?(36.0%):그렇습니까(2.6%)」の結果であり、全体の約 90%(240 個)に「？」マークがついているとしている。日本語の疑問文のイントネーションは文末上昇調、同意・納得のイントネーションでは文末下降調が現れるが、韓国内での日本語教科書には「그래요?」「그렇습니까?」の訳語に「？」マークの文末記号が日本語の文末韻律習得の妨げになると報告している。

以上の先行研究をまとめると、日本人韓国語学習者のイントネーションでは、頭高型とも言える韻律パターンが多く、疑問詞疑問文の文末音調では、「食べる? : ○●○<sup>3</sup>」のような中高型系の文末イントネーションのパターンより「行く? : ○●<sup>↑</sup>」のような平板型系の韻 文末イントネーションのパターンが多く現れていることが分かる。さらに、Yes-No 疑問文の「~어요?」の部分では、中立・驚き・疑い・落胆・うれしい気持ちでの表現なのかに関する問題点があるとまとめられる。

そこで、感情と態度を表す機能を持つ文末イントネーションが、韓国語母語話者の発話の中では、どのような特徴を持つのか。韓国語母語話者の発話では発話者の感情の意図が聴者にそのまま伝わるのか。そのまま伝わる韻律パターンの視覚化を試みることにした。

### 3. 調査方法

まず、韓国語母語話者はソウル方言話者の大学生に限定した。その韓国

---

<sup>3</sup> ● : 高、○ : 低、<sup>↑</sup> : 文末上昇調を示す記号として用いた。

語母語話者 33 名が中立・驚き・疑い・落胆・嬉しいという 5 つのパターンで言う「아 그래요」の音声を韓国語母語話者 30 名に聴覚的同定実験を行った。

この調査からの課題は以下のように設定する。

課題 1：感情別発話に対する聴覚評定者の同定率<sup>4</sup>

課題 2：感情別発話に対する同定の分布

課題 3：感情別発話の評定結果から上(A)・中位群 (B) の音響分析結果

まず、課題 1 の感情別発話に対する聴覚評定者の同定率は、33 名の感情別発話が母語話者の聴覚にはどのように捉えられるかを目的とする。

次に、課題 2 の感情別発話に対する同定の分布は、発話者の意図と違った聴覚評定の結果が出た場合、5 つの感情表現の内、どの感情表現に評定しているかの分布を調査することが目的である。

最後に、課題 3 の感情別発話の聴覚評定結果から同定率の高い上位群と中位群に属する発話の音響分析を行う。この結果からは、話者の意図が聴者に伝わり易い韻律パターンを明らかにすることが目的である。

### 3.1 音声提供者

音声提供者は、韓国人のソウル方言話者の大学生 33 名<sup>5</sup> (男性 6 名、女性 27 名、平均年齢 21.9 歳)である。ソウル・京畿道で言語形成期<sup>6</sup>を過ごした人を対象とした。録音は非圧縮「リニア PCM 録音形式」対応のステレオ IC レコーダー ICD-UX544F とパソコンに単一指向性のマイクを接続して録音した。

---

<sup>4</sup> 正答率は、発話者の感情意図が聴者にどのように伝わっているかの尺度と定義する。なお、同定は、聴者が発話者の意図をどのように判断・同定しているかの尺度と定義する。

<sup>5</sup> 音声収録に参加した人は合計 39 名中 A: 아 그래요. の「그」のところが無声化が頻繁に起こる 6 名は音響分析のため除いた。

<sup>6</sup> 言語形成期は生まれてから小学校・中学校までの期間に設定し、その期間をソウル・京畿道で過ごし、その後、慶尚道に居住履歴のない人を対象とした。

### 3.2 発話資料及び感情表現

録音収録は表 2 の会話文を利用した。

表 2 発話資料

| ●会話文●          | ●会話●            |
|----------------|-----------------|
| A: 미나 씨도 와요?   | A: ミナさんも来ますか。   |
| B: 네 미나 씨도 와요. | B: はい。ミナさんも来ます。 |
| A: 아 그래요       | A: あ、そうですか。     |

発話者には表 2 の発話資料の会話文とともに A: 아 그래요( A : あ、そうですね)のところを五つの感情表現に発話してくれることを依頼した。感情表現別の説明に関しては表 3 に示した説明内容を用いた。各感情別発話を 3 回収録し、2 回目の発話文を聴覚評定実験及び音響分析の対象とした。感情表現別の説明に関しては表 3 に示した説明内容を用いた。

表 3 感情別説明内容

| 感情  | 説明内容   |
|-----|--|
| 中立  | 納得とも表現できる。ミナさんが来るという情報は分かったという気持ちで、“あ、そうなんだ”程度の表現である。            |
| 驚き  | ミナさんが来るという情報を聞き、“意外と感じて驚いた時”の表現である。                              |
| 疑い  | ミナさんが来ると言ってはいるものの、今までのミナさんの態度から判断して、“来ないだろうにという疑いを抱いている時”の表現である。 |
| 落胆  | ミナさんは来ないでほしかったのに来るという場面で、“自分の願望と違ってがっかりした時”の表現である。               |
| 嬉しい | ミナさんも来てほしいと思っていた時の気持ちであり、“自分の願望どおりになった時の嬉しさ”の表現である。              |

### 3.3 分析方法

#### 3.3.1 聴覚同定方法

音声提供者の 33 名が発話した 5 つの感情別発話の合計 165 個の音声をそれぞれ一つずつファイル化し、ランダムに配置した。聴覚評定実験における集中力を保つため、7 回目の実験では 15 項目、1 回目から 6 回目までは、一回ごとに 25 項目の音声ファイルを配置し聴覚評定実験を行った。

#### 3.3.2 音響分析方法

音響分析においては、以下の基準で分析した。

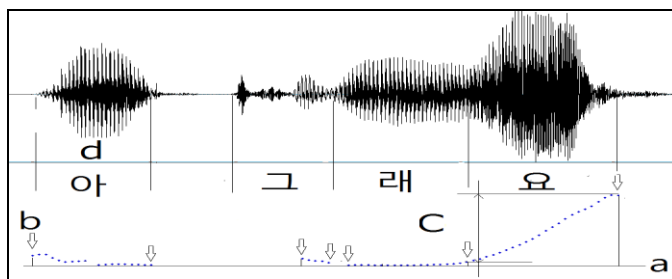


図 1 音響分析の例

図 1 に b で示した「아 그래요」の各音節の始点と終点の F0 値と d で示している持続時間を測定した。音響分析では、発話者個人から測定された最小の F0 値(Hz)を基準としてセミトーン(以下、st)に変換した<sup>7</sup>。セミトーンに変換するに当たり、図 1 で示している a のように話者別の最低 F0 値

<sup>7</sup> F0 値は、声帯の振動が一秒に何回あるかによって示される物理量である。相対的に女性より大きい声帯を持つとされている男性の F0 値の平均は 120Hz 程度で、女性は 230Hz、児童は 300Hz 前後で現れ、男女間に F0 値の現れる領域が異なることが知られている。従って、F0 値の分析においては性別を統一することが一般的とされている。しかし、Ladd.D.R.(1996)では、同じ性別のグループの中でも、高い周波数帯の人や低い周波数帯の人がいることや周波数帯が異なる人の間でも、発話内における変化の差は少ないことから、声から抽出された F0 値をそのまま比較するのではなく、それぞれの発話者が発話した発話体からその基準点を設け、その基準点からの変動量で示すことは、発話者の個人差を少なくした結果、言語内的変化の記述が可能であるとしている。



をセミトーン変換の基準値とした。Hz の代わりに st の単位を採択した理由は、Hz の単位で結果が示されても、学習者、研究者共にどのくらいの差であるかの感覚がつかみづらいが、st は音階との比較が可能である点から st 単位を採択した。なお、ピッチの変動を観察する際、図 1 で示している C のピッチの変動量が急激な変動なのか、緩やかな変動なのかは、各音節間の持続時間(d)が関係する。つまり、同じ高さのピッチの変動があっても、長い持続時間間での変動と短い時間の中での変動はその急激さが異なる。このような点を補うために、各音節内部の持続時間と F0 値の変動を基準とした「傾き度<sup>8</sup>」という分析指標を新たに設定した。傾き度は、同一の F0 値の変動に対し、持続時間が長くなればなるほど小さくなり、緩やかな上昇、下降になることを意味する。上昇の場合は+値をとり、下降の場合は-値をとる。

#### 4. 結果

韓国語母語話者 33 名が発話した「아 그래요」の 5 つのタイプ、全 165 個の感情別発話内容に対し、ソウル方言話者 30 名の聴覚的同定結果を分析した。

##### 4.1 感情別発話に対する聴覚評定者の同定率と分布

まず、課題 1 の感情別発話に対する聴覚評定者の同定率を見てみる。33 名の発話者別、同定率は 38.2%であり、話者別に見た場合、最低値の人は疑いの発話で 4.0%、最高値の人は落胆と嬉しい気持ちの発話でそれぞれ 100%の同定率であった。33 名の間での標準偏差は 13.18%であった。つまり、韓国語母語話者 33 名の中立・驚き・疑い・落胆・嬉しいという 5 つのパターンでの発話「아 그래요」の音声が他のグループの 30 名の韓国語母語話者に話者の意図通り伝わった割合である。次に、聴覚評定者別、同

---

<sup>8</sup> 傾き度は持続時間を分母に取り、音節内でのピッチ変化の急激度を表す。本稿で測定した各音節内での F0 値変動の平均値は 1.13st であり、持続時間の平均は 0.18msec である。この場合の傾き度は 5.6st/msec である。

定率は全 165 個の音声を評定した結果、平均同定数は、63.0 項目で 38.2% となる。

次に、課題 2 の感情別発話に対する同定の推移に関しては、以下の表 4 に示す。

ここで分析対象とするデータは、発話人数の 33 名×各感情別発話 5 タイプ×聴覚評定人数 30 名の結果である。総 4950 の評定結果からの分析結果であり、各感情別データ数は 990 個が分析対象となる。これは各感情別発話に対し、聴覚評定者の判断のばらつきが伺える。まず、「中立」の意図を持つ発話に関しては、990 個の評定資料から 413 個(41.7%)が中立で評定され、最も高い評定値が得られた。中立の意図を持つ発話の 20%弱は、驚きや疑いとも判断される結果であった。

次に、「驚き」の発話意図を持つ発話に関しては、40.0%が驚きと評定し、20%弱が中立、嬉しい気持ちとして評定している。

続いて、「疑い」の発話意図を持つ発話は、最も判断し難い感情表現であることが分かる。つまり、「疑い」の意図を持つ「아 그래요」と発話しても、27.6%は中立の意図と捉え、17.0%は驚き、24.5%は疑い、25.1%は落胆、5.8%は嬉しいと評定される結果となった。

表 4 感情別発話に対する聴覚評定の分布

|           |     | 聴覚評定結果(単位：割合%) |      |      |      |      |
|-----------|-----|----------------|------|------|------|------|
|           |     | 中立             | 驚き   | 疑い   | 落胆   | 嬉しい  |
| 感情別<br>発話 | 中立  | 41.7           | 18.2 | 17.2 | 14.6 | 8.3  |
|           | 驚き  | 18.1           | 40.0 | 11.6 | 11.2 | 19.0 |
|           | 疑い  | 27.6           | 17.0 | 24.6 | 25.1 | 5.8  |
|           | 落胆  | 25.1           | 4.0  | 13.4 | 52.8 | 4.7  |
|           | 嬉しい | 19.2           | 27.5 | 7.6  | 10.4 | 35.3 |

「落胆」の発話意図を持つ発話に関しては、52.8%が落胆で評定され、最も高い評定結果が得られたが、25.1%は落胆の意図が中立で評定された。

最後に「嬉しい」発話意図を持った発話に関する評定結果は、中立が

19.2%、驚きが 27.5%、嬉しいが 35.3%で嬉しいと評定された発話が最も多いと言えるものの、中立と驚きに判断された発話も多い。

疑いの発話以外は、発話者の意図通りの聴覚評定結果が最も高く現れたが、その割合は、最低値 24.6%（疑い）から最高値 52.8%（落胆）の間の同定率であった。表 4 の結果から、韓国語母語話者が発話し、韓国語母語話者の聴覚評定した結果からも分かるように、「아 그래요」の感情判断にはバラつきが大きいことが分かり、指導項目としても非常に難しい項目であることが推察できる。ましてや、韓国語を学習する学習者には困難きわまりない項目であろう。しかし、以上の結果は、一つの前提が必要である。それは、発話者の音声感情が感情別意図に沿う発話表現が出来ているという前提である。ところが、多くの言語実験では感情表現に関する前提を確保する音声データの確保は容易ではない。どのような音声特徴を持って感情別に分けられるかはまだまだ解決すべき課題が多い。

従って、以下では、多くの評定者に高い評定値を得られた感情別発話とそうでない発話項目を分けて音響分析を試みることにし、韓国語の「아 그래요」のピッチの特徴を明らかにする。

## 4.2 感情別発話の評定上位群・中位群の音響分析結果

### 4.2.1 感情別発話の評定上位群・中位群の同定率

韓国語母語話者の感情別発話の音声の特徴を明らかにするために、33名の発話に対する聴覚評定値の上位群(A)・中位群(B)を選別し、その評定結果を表 5 に示した。下位群では、あらゆる特徴の音声が見れているため、分析・報告の対象から除外した。

まず、表 5 では、韓国語母語話者の感情別発話に対する聴覚評定実験で各感情別に同定率が最も高い音声を上位群とし、同定率が 50%に最も近い音声を中位群とし、その音声に対する聴覚評定の同定率を示した。

上位群には、落胆・嬉しい感情表現の発話は、聴覚評定に参加した 30名の全員から、それぞれ落胆・嬉しいと同定された音声であり、中立の音声は、73.3% (23名)、驚きは、80%(24名)、疑いは 63.3%(19名)の同定率

の音声は上位群に含まれている。中位群には、中立では 50%(15 名)の同定率で、33.3%(10 名)は疑いと同定している音声であり、驚きでは、53.3%(16 名)の同定率で、33.3%(10 名)が中立と同定している音声である。続いて、疑いでは、53.3%(16 名)の同定率で、33.3%(10 名)が落胆と同定している音声であり、落胆では、46.7%(14 名)の同定率で、30%(9 名)が中立と、20%(6 名)が疑いと同定している音声である。最後に、嬉しいでは、53.3%(16 名)の同定率で、33.3%(10 名)が驚きと同定している音声は中位群に属している。

表 5 韓国語母語話者の感情別発話に対する同定率の上位群(A)・中位群(B)

|     |     | 評定度数 (全数 30) |           |           |           |           | 評定割合(%)     |             |             |              |              |
|-----|-----|--------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|-------------|-------------|--------------|--------------|
|     |     | 中立           | 驚き        | 疑い        | 落胆        | 嬉しい       | 中立          | 驚き          | 疑い          | 落胆           | 嬉しい          |
| 中立  | A-1 | <b>23</b>    | 0         | 3         | 2         | 2         | <b>73.3</b> | 0.0         | 10.0        | 6.7          | 6.7          |
|     | B-1 | <b>15</b>    | 3         | 10        | 2         | 0         | <b>50.0</b> | 10.0        | 33.3        | 6.7          | 0.0          |
| 驚き  | A-2 | 3            | <b>24</b> | 3         | 0         | 0         | 10.0        | <b>80.0</b> | 10.0        | 0.0          | 0.0          |
|     | B-2 | 10           | <b>16</b> | 4         | 0         | 0         | 33.3        | <b>53.3</b> | 13.3        | 0.0          | 0.0          |
| 疑い  | A-3 | 1            | 2         | <b>19</b> | 8         | 0         | 3.3         | 6.7         | <b>63.3</b> | 26.7         | 0.0          |
|     | B-3 | 1            | 3         | <b>16</b> | 10        | 0         | 3.3         | 10.0        | <b>53.3</b> | 33.3         | 0.0          |
| 落胆  | A-4 | 0            | 0         | 0         | <b>30</b> | 0         | 0.0         | 0.0         | 0.0         | <b>100.0</b> | 0.0          |
|     | B-4 | 9            | 1         | 6         | <b>14</b> | 0         | 30.0        | 3.3         | 20.0        | <b>46.7</b>  | 0.0          |
| 嬉しい | A-5 | 0            | 0         | 0         | 0         | <b>30</b> | 0.0         | 0.0         | 0.0         | 0.0          | <b>100.0</b> |
|     | B-5 | 3            | 10        | 1         | 0         | <b>16</b> | 10.0        | 33.3        | 3.3         | 0.0          | <b>53.3</b>  |

この結果から、評定の上位群の音声と中位群の音声ではどのような特徴があるのかについて 4.2.2 で調べた。

#### 4.2.2 感情別発話の評定上位群 (A)・中位群 (B) の音響分析

まず、「中立」発話の上位群 (A-1) の音声は、30 名の聴覚評定者の中で

73.3%が中立発話と評定している結果である。A-1 発話の場合、「ㄱ」の音節で-3.2st の下降が現れてからは、「요」にかけて緩やかに下降し続けており、文末上昇調は現れない。その反面、B-1 の発話は、「ㄹ」から上昇調が始まり、「요」の音節内では 4.5st の上昇調が現れていることが表 6 と図 2 で確認できる。この「ㄹ」から「요」にかけての上昇調が上位群の A-1 の音声との大きな差であり、評定者の 50%だけが中立として評定しており、33.3%は「疑い」と評定する韻律パターンであった。

表 6 中立発話の音節内ピッチの変動量と (St) と音長 (msec)

|    |     | 아           |              | ㄱ           |              | ㄹ           |              | 요           |              |
|----|-----|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|
|    |     | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) |
| 中立 | A-1 | -1.7        | 0.1          | -3.2        | 0.1          | -0.3        | 0.2          | -0.2        | 0.2          |
|    | 傾き度 | -17.4       |              | -26.7       |              | -1.4        |              | -0.9        |              |
|    | B-1 | -0.8        | 0.4          | -2.0        | 0.2          | 1.6         | 0.2          | 4.5         | 0.3          |
|    | 傾き度 | -2.4        |              | -16.5       |              | 9.2         |              | 18.1        |              |

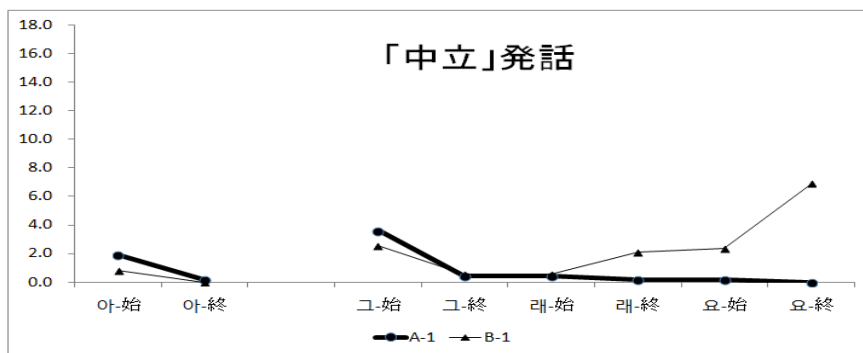


図 2 韓国語母語話者の「中立」発話に対する上位群 (A)・中位群 (B) のピッチ曲線

次に、「驚き」発話の上位群 (A-2) の音声は、30 名の聴覚評定者の中で 80%が驚き発話と評定している結果である。

表 7 驚き発話の音節内ピッチの変動量と (St) と音長 (msec)

|    |     | 아           |              | ㄱ           |              | 래           |              | 요           |              |
|----|-----|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|
|    |     | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) |
| 驚き | A-2 | -2.1        | 0.2          | -3.1        | 0.1          | 2.2         | 0.2          | 10.9        | 0.2          |
|    | 傾き度 | -13.7       |              | -23.9       |              | 14.9        |              | 63.9        |              |
|    | B-2 | -1.4        | 0.3          | -3.1        | 0.1          | 1.2         | 0.2          | 5.1         | 0.2          |
|    | 傾き度 | -5.7        |              | -26.2       |              | 7.7         |              | 26.7        |              |

A-2 発話の場合、「ㄱ」の音節で-3.1st の下降が現れてからは、「요」の始点にかけて緩やかに上昇し続けており、「요」の音節内で 10.9st の急激な上昇調が現れている。その反面、中位群の B-2 の発話は、「래」から緩やかな上昇調が始まり、「요」の音節内では 5.1st の上昇調が現れていることが、中立発話の中位群の A-2 の音声と類似している。その結果、B-2 の音声は、驚きの発話意図を持っているにもかかわらず、53.3%だけが驚きと評定しており、33.3%(10名)は中立と評定された韻律パターンである。

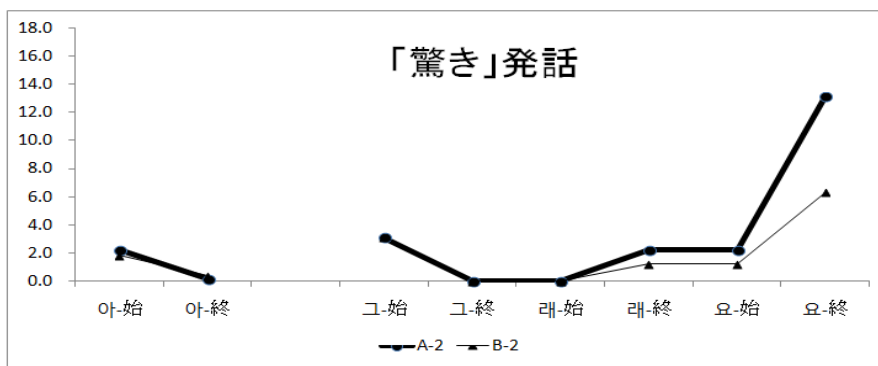


図 3 韓国語母語話者の「驚き」発話に対する上位群 (A)・中位群 (B) のピッチ曲線

次に、「疑い」発話の上位群 (A-3) の音声は、30名の聴覚評定者の中で 63.3%が疑い発話と評定している結果であるが、中位群の B-3 の 53.3%の同定率と 10%の差しかない音声でもある。A-3 と B-3 のピッチ曲線も非常に類似していることは、表 8 と図 3 で分かる。A-3 発話の場合、「요」の音節内で 12.6st の急激な上昇調が特徴的であるが、中位群の B-3 の発話は、

「ㄱ」から緩やかな上昇調が始まり、「ㅇ」の音節内では 5.5st の上昇調が現れている。この特徴は、中立発話の中位群の B-1、驚き発話の中位群の B-2 と酷似したピッチパターンである。前述したように疑いの発話意図は、33名の感情発話中、最も同定率の低い感情表現でもあり、中立と評定されたのが 27.6%、落胆と評定されたのが 25.1%、疑いと評定されているのは 24.6%に過ぎなく、5つの感情表現の中で最も話者の意図が聴者に伝わりにくい感情表現である可能性が高い。その中で、A-3 のようなピッチパターンは、疑いと評定したのが 63.3%、落胆と評定したのが 26.7%を占め、B-3 のようなピッチパターンは疑いと評定したのが 53.3%、落胆と評定したのが 33.3%であり、疑いと落胆での判断が難しいことが伺える。

表 8 疑い発話の音節内ピッチの変動量と (St) と音長 (msec)

|        |     | ㅏ           |              | ㄱ           |              | 래           |              | ㅇ           |              |
|--------|-----|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|
|        |     | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) |
| 疑<br>い | A-3 | -2.2        | 0.4          | 0.7         | 0.1          | -0.3        | 0.1          | 12.6        | 0.2          |
|        | 傾き度 | -6.2        |              | -5.5        |              | -2.0        |              | 78.4        |              |
|        | B-3 | -2.4        | 0.1          | 1.0         | 0.2          | -1.7        | 0.2          | 5.5         | 0.2          |
|        | 傾き度 | -21.6       |              | 5.5         |              | -9.9        |              | 22.7        |              |

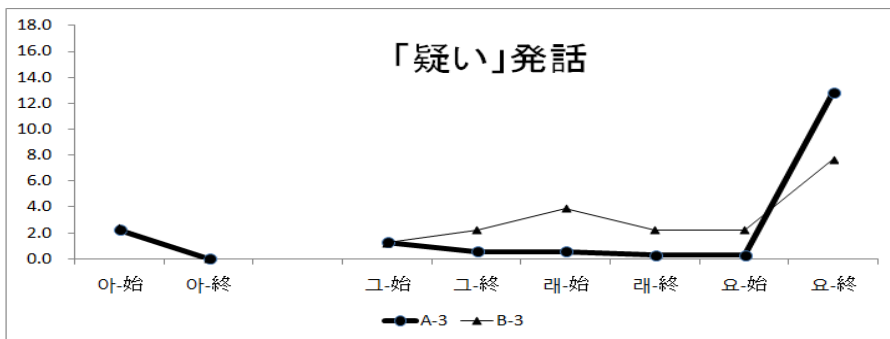


図 4 韓国語母語話者の「疑い」発話に対する上位群 (A)・中位群 (B) のピッチ曲線

続いて、「落胆」の上位群 (A-4) の発話は、30名の聴覚評定者の全員が落胆と評定し、100%の同定率の発話である。

表 9 落胆発話の音節内ピッチの変動量と (St) と音長 (msec)

|    |     | 아           |              | 그           |              | 래           |              | 요           |              |
|----|-----|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|
|    |     | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) |
| 落胆 | A-4 | -1.8        | 0.1          | -1.0        | 0.2          | -0.7        | 0.1          | 3.5         | 0.2          |
|    | 傾き度 | -13.2       |              | -5.1        |              | -5.1        |              | 15.0        |              |
|    | B-4 | -0.2        | 0.3          | -1.3        | 0.1          | -1.3        | 0.2          | 1.1         | 0.3          |
|    | 傾き度 | -0.7        |              | -9.7        |              | -7.5        |              | 3.4         |              |

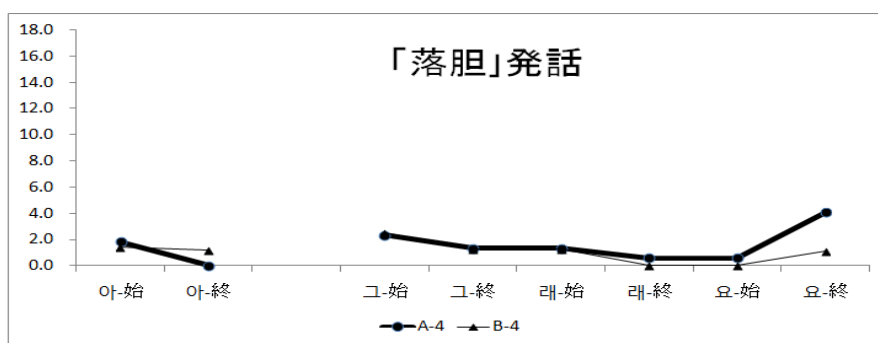


図5 韓国語母語話者の「落胆」発話に対する上位群 (A)・中位群 (B) のピッチ曲線

この落胆の発話は、「아」の音節も下がり調で、「그」の音節から「요」の音節の始点まで下がり続け、「요」の音節内で 3.5st の上昇調を見せている韻律パターンである。この結果と比べて、中位群の B-4 の発話は、46.7% の同定率で「그」の音節から「요」の音節の始点までのピッチパターンは A-4 と酷似しているが、「요」の音節内での上昇幅が 1.1st に過ぎなく、30% の評定者は中立の発話と評定したピッチパターンである。

最後に、「嬉しい」の上位群 (A-5) の発話も、30 名の聴覚評定者の全員が嬉しいと評定し、100% の同定率の発話である。



表 10 嬉しい発話の音節内ピッチの変動量と (St) と音長 (msec)

|     | 아           |              | 고           |              | 래           |              | 요           |              |     |
|-----|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-------------|--------------|-----|
|     | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) | 終-始<br>(st) | 音長<br>(msec) |     |
| 嬉しい | A-4         | -0.5         | 0.2         | -1.9         | 0.1         | 1.2          | 0.2         | 10.6         | 0.2 |
|     | 傾き度         | -2.4         |             | -15.6        |             | 8.1          |             | 66.1         |     |
|     | B-4         | 2.2          | 0.2         | -3.8         | 0.2         | 2.4          | 0.2         | 9.1          | 0.3 |
|     | 傾き度         | 9.6          |             | -22.1        |             | 14.5         |             | 30.2         |     |

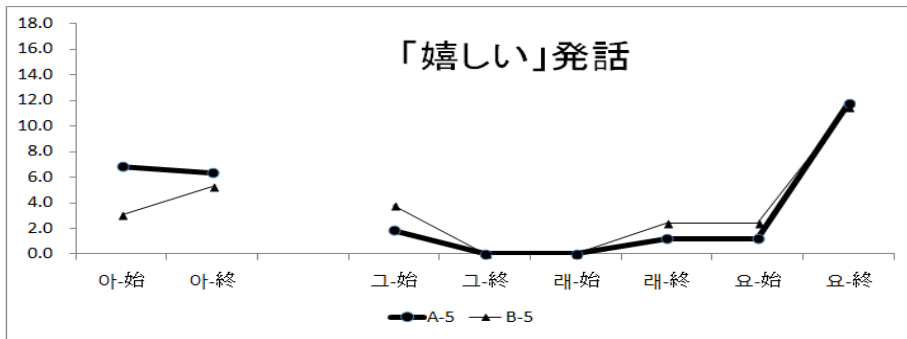


図 6 韓国語母語話者の「嬉しい」発話に対する上位群 (A)・中位群 (B) のピッチ曲線

この嬉しいの発話は、「아」の音節が他の4の感情発話と違う。下降は -0.5st しかないが、相当高く発話されている。つまり、「아」の音節からも嬉しい気持ちが全面に出ていることがわかり、「요」の音節内で 10.6st の上昇調を見せている韻律パターンである。しかし、この結果と比べて、中位群の B-5 の発話は、53.3%の同定率であるが、ピッチ曲線のパターンは A-4 のパターンと比べると、「아」の音節が上がり調であること以外はピッチ曲線上では違いがそれほどない。しかし、A-4 の発話は「요」の音節内での上昇幅と音調で計算した「傾き度」が 66.1st/msec に対し、B-5 の発話では 30.2 st/msec であり、A-5 の発話の方が短い時間に急激な上昇調を見せていることが分かる。

以上の結果から、感情別発話の評定上位群と中位群に分けての音響分析を行った結果を以下にまとめられる。

1. 文末上昇調が現れないのは「中立」の発話だけである。
2. 文末で緩やかな上昇調が現れるのは「落胆」である。
3. 文末で急激な上昇調が現れる「驚き」、「疑い」「嬉しい」気持ちの感情表現は以下に区分できる。「驚き」の気持ちでの発話は、「아」の音節はそれほど高くなく、文末で急激な上昇調を伴う必要がある。「嬉しい」気持ちを発する場合は、「아」の音節から高く始まり、下降調で発話することで驚きと疑いとは区分出来る。ところが、「疑い」の気持ちを発する際も、文末の急激な上昇調が伴うが、その場合、他の気持ちとも捉えられる可能性が高く、イントネーションで疑いの気持ちの表現、聴者側が話者の意図を察するには最も難しい感情表現である可能性が高い。

中立発話では、文末を上げない韻律パターンが韓国語母語話者の多くに中立の発話として認められ、驚き、疑い、落胆、嬉しい気持ちを表現する場合は、疑問文に似た文末の上昇調から話者の感情を察しようとする可能性が高い。

## 5. 考察

本稿は、韓国人母語話者の感情別イントネーションの特徴を把握・特定化し、学習者への教育に応用出来る韻律情報の視覚化資料の開発のため、韓国語母語話者 33 名が発話した 5 つの感情別発話の合計 165 個の音声を確保した。これらの音声を 使い、話者の意図を聴者側で同定させるため、同じく韓国語母語話者 30 名に聞かせて 5 つの感情別の「아 그래요」に対する 4,950 個の聴覚評定結果が得られた。各感情別聴覚評定結果は 990 個である。

これらの結果から、二つの課題の結果を明らかにした。

まず、課題 1：感情別発話に対する聴覚評定者の正答率とも言える同定率に関しては、「中立」の発話では 41.7%、「驚き」では、40%、「疑い」では、24.5%、「落胆」では、52.7%、「嬉しい」では、35.3%であり、全体の

平均同定率は 38.2%であった。

次に、課題 2 の感情別発話に対する同定の分布を見てみる。矢印の左側は感情別発話意図を意味する。右側は聴覚評定結果の多い順に示した。

|     |   |            |   |    |   |           |   |     |   |     |
|-----|---|------------|---|----|---|-----------|---|-----|---|-----|
| 中立  | → | <b>中立</b>  | > | 驚き | > | 疑い        | > | 落胆  | > | 嬉しい |
| 驚き  | → | <b>驚き</b>  | > | 中立 | > | 嬉しい       | > | 疑い  | > | 落胆  |
| 疑い  | → | 中立         | > | 落胆 | > | <b>疑い</b> | > | 驚き  | > | 嬉しい |
| 落胆  | → | <b>落胆</b>  | > | 中立 | > | 疑い        | > | 嬉しい | > | 驚き  |
| 嬉しい | → | <b>嬉しい</b> | > | 驚き | > | 中立        | > | 落胆  | > | 疑い  |

中立、驚き、落胆、嬉しい発話では、話者の意図通りの感情が最も多く同定されてはいるものの、そのバラツキが非常に大きい。特に、疑いの感情を表現した発話を中立で捉えた割合が 27.6%、驚きで捉えた割合が 17.0%、疑いで捉えた割合が 24.5%、落胆で捉えた割合が 25.1%、嬉しいで捉えた割合が 5.1%であり、韓国語母語話者の発話と韓国語母語話者の聴覚評定の過程でも感情表現の中から「疑い」の意図を特定することは難しいことが分かる。これらの結果は、日本語の Yes-No 疑問文に現れる「～か」と韓国語の Yes-No 疑問文の「～어요?」のピッチの実現の様子だけを比較し、日本語母語話者の韓国語発話からは、中立的発話意図なのか、驚き、疑い、落胆、うれしい気持ちでの表現をしているのかにかかわる誤用のパターンが多い (Jung M.S. 2003) という報告は、韓国語母語話者にも当てはまる結果となった。ただし、そのイントネーションのパターンが学習者と母語話者とではどのように異なっているかについては日本人母語話者の韓国語発話の聴覚評定実験及び音響分析が必要となるので、これは今後の課題となった。

さらに、感情及び態度の伝達機能は、イントネーションの社会言語学的機能と比較するとコミュニケーションで重要な機能を担うが、そのパターンを一般化し教育へ応用することは難しい (Kim E.A. et, 2008 : 101) としていることから、本稿では、教育的応用を目的に次の課題 3 を設定した。

それは、感情別発話の評定結果から上位群(A)・中位群(B)の音響分析を行い、そのピッチパターンを明らかにすることである。各感情別にどのようなピッチパターンが韓国語母語話者には、同定されやすいのか、各感情別発話から最も同定率が高い発話を上位群とし、同定率が50%に近い発話を中位群にして、上位群と中位群ではどのような違いがあるかを調べた。

その結果、

1. 文末上昇調が現れないのは「中立」の発話だけである。

2. 文末で緩やかな上昇調が現れるのは「落胆」である。

3. 文末で急激な上昇調が現れる「驚き」、「疑い」「嬉しい」気持ちはピッチ曲線の情報だけでは、見分け方が非常に難しいことが分かった。その中でも、「驚き」と「嬉しい」気持ちはピッチ曲線上では、同じ気持ちなのかも知れない。驚いたけど嬉しい、嬉しい情報で驚いたのように言葉上で分けられるような気持ちがイントネーション上では見分けが難しい感情表現である可能性も大いにある。ところが、この実験で最も大きい収穫もある。本稿の1. はじめにのところで言及したように 韓国語教育現場での経験上、初級学習者から上級学習者の間で最も発話頻度数の高い「あ、グレヨ:아 그래요 : Oh, really」の文末イントネーションが急激に上昇させた学習者の発話がこれまで気になることが多々あった。その場合、韓国語母語話者は、「驚き」と「疑い」、特に、「疑い」の気持ちとも捉えられることは、韓国語音声教育現場に示唆することが大きい。文末を急激に上げることで、話者の意図していない感情表現として伝わる可能性が高いからである。

以上の結果から、韓国語教育的立場で考えると、「-아/어요」を含めた「아 그래요」の教育には、感情を排除した中立場面の発話では、文末上昇調が現れないように指導する必要がある、驚き、疑い、落胆、嬉しい気持ちを提示の場面では、文末上昇調を伴う必要があることを指導項目に入れる必要がある。さらに、中立の意味での「아 그래요」に文末上昇調が現れた場合、疑い、落胆など、話者の意図と違う意味で聴者に伝わる可能性が大きいことは、非常に重要な音声指導の項目であろう。

## 謝辞

音声収録実験にご参加くださった国際教養大学の交換留学生や梨花女子大学、それから平澤大学の持田裕美子先生と学生、また、音声聞き取り評定実験にご参加くださった慶熙大学の学生、それから江源大学の神野未翔子先生と学生の皆さんに心から感謝申し上げます。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 15K02722.

## 参考文献

- Grice, H Paul(1975) *Logic and conversation. Syntax and semantics 3: Speech acts*, ed. By P.Cole and J. Morgan, 41-58 NY: Academic Press
- Jun.S.A.(1993/96) *The Phonetics and Phonology of Korean Prosody*. Doctoral dissertation, The Ohio State University. Published by Garland Press, New York,1996
- Jun.S.A. & Oh.M.R.(1996), *A Prosodic Analysis of Three Types of Wh-Phrases in Korean*, *Language and Speech* 39-1, pp37-61.
- Jun.S.A.(2000). *K-ToBI (Korean ToBI) Labelling Convention(ver 3.1. in November 2000)* <<http://www.linguistics.ucla.edu/people/jun/ktobi/K-tobi.html>>(2015年4月14日閲覧)
- Jung M.S.(2002) 「The Teaching Method of Korean Intonation by Basic Pattern」、国際韓国語教育学会、『韓国語教育』、第13巻1号、pp225-241 (정명숙(2002) 「한국어 억양의 기본 유형과 교육 방안」, 국제한국어교육학회, 『한국어교육』, 제13권1호、pp225-241
- Jung M.S.(2003) 「The Intonation of Japanese and Chinese Korean-learners」、国際韓国語教育学会、『韓国語教育』、第14巻1号、pp233-247 (정명숙(2003) 「일본인과 중국인의 한국어 억양」, 국제한국어교육학회, 『한국어교육』, 제14권1호、pp233-247)
- Kim E.A. (2002) 「発音教育資料開発研究」 国際韓国語教育学会、『第12次学術大会発表要旨集』、pp229-238 (김은애(2002), “발음교육 자료개발 연구”, 한국어교육학회 제12차 학술대회 발표 요지집, 국제한국어교육학회, pp229-238)
- Kim E.A. et(2008) 「Methodology of Teaching Korean Intonation」 国際韓国語教育学会、『韓国語教育』、第19巻2号、pp93-123 (김은애, 박기영, 박혜진, 진문이(2008) 「한국어 억양 교육을 위한 방법론적 고찰 : 교재 개발의 측면에서」, 국제한국어교육학회, 『한국어교육』, 제19권2호、pp93-123)
- Ladd.D.R.(1996). *Intonational phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee H.G.(1996) 「韓国語談話表紙語“グレ”の意味研究」、談話・認知言語学会、『談話と認知』、第3巻、pp1-26(이한규 (1996) 「한국어 담화 표지어 '그레'의 의미 연구」, 담화・인지언어학회, 『담화와 인지』 .제3권 .pp.1-26) <http://dlps.nanet.go.kr/DlibViewer.do?cn=KINX2006041675&sysid=nhn>
- Lee H.Y.(1996) 『国語音声学』太学社、pp219-244 (이호영(1996) 『국어 음성학』, 태학사、pp219-244)
- 長谷川由起子(2005) 「The Effect of Korean Tonal Education for Japanese Native Speakers -Focused on the Pronunciation of Initial Stops and Affricates」 国際韓国語教育学会

会、『韓国語教育』、第16卷3号、pp379-404 (하세가와 유키코(2005)「일본어를 모어로 하는 학습자에 대한 음조 교육의 효과 : 어두 파열음 및 파찰음의 발음을 중심으로」, 국제한국어교육학회, 『한국어교육』, 제16권3호、pp379-404)  
三木理(2015)「韓国における日本語教科書の問題点-「そうですか」の対訳について-」、第2回日本語教育学会研究集会ポスター発表 (於：名古屋大学2015.06.13)

(国際教養大学・教養学部)

jchoi@aiu.ac.jp

## 韓国語教育研究 第6号

ISSN 2186-2044

2016年9月10日印刷

2016年9月15日発行

発行 日本韓国語教育学会  
〒577-8052 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付  
e-mail: jaklemejiro@gmail.com

編集 韓国語教育研究編集委員会  
(委員長 / 金世徳 kim@ashiya-u.ac.jp)

印刷 株式会社 仙台共同印刷  
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区  
日の出町二丁目4-2  
TEL 022(236)7161(代)/FAX 022(236)7163